

龍ヶ崎小学校の歴史

その105年の流れをふりかえる

本校は、学制の発布されて2年後、明治7年6月7日、横町の大統寺一室を借用、仮教場として創立された。したがって、本年6月7日で106年の才月を迎えたことになる。

この間、校名も幾度か変わり、児童数の増加に伴う新校舎の建設により、所在地も三か所の移り変わりがみられる。初代校長は、杉浦久彦氏とあり、現校長の中島満夫氏まで、29人もの名校長が、地域の協力を得ながら、それぞれの時代の要請にこたえるべく、特色ある学校経営に尽力され、伝統を継がれてきている。

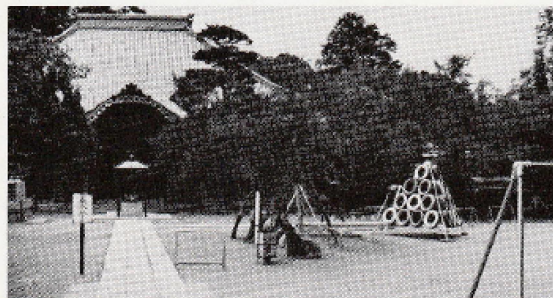
以下、龍ヶ崎小学校「学校沿革誌」を参考に、本校の百余年にわたる歴史について、その概略を述べる。

明治時代

— 創立のころ —

創立当時、本校は、「龍崎学校」と呼ばれ、児童数147名、教員数4名、下等、上等各4年の課程が生まれ、かなりきびしい試験で進級、卒業が行なわれた。教科書としては、「啓蒙知恵の輪」「西洋事情」「農事往来」「自由の理」等々といったもので、それぞれの課程で適するものを使用した。初代校長（教授主任）は、杉浦久彦氏である。

明治9年、「龍崎小学校」、同11年、「龍ヶ崎小学校」と呼ばれ、児童数は、440名程に増加、この年より、大統寺の仮教場は狭く



創立当時仮校舎の置かれた大統寺

— 上町に新校舎が建設されたころ —

明治11年、10月13日、上町八坂神社裏地に、木造2階建10教室の校舎が建設される。町民の教育に対する理解と熱意によるものであることは言うまでもないが、第2代校長（教授主任）山田惟一氏の指導力と人格が、町民の心を動かしたためと伝えられている。この地に現在もみられる氏の頌徳碑をみると、この間の事情及び氏の人柄について知ることができる。昭和10年、根町に新校舎が建設されるまで、およそ50余年間、この地が小学校の所在地となる。山田惟一氏は、校舎新築後、間もなく退職、同年11月より、校長は第3代上島齊氏が代わる。

明治13年、「茨城県常陸国河内郡龍ヶ崎小学校」と呼ばれ、改正教育令によって、小学校の課程は、初等、中等各3年、高等科2年というように改められる。児童数は、450名前後。校長は、第4代椎名健氏。



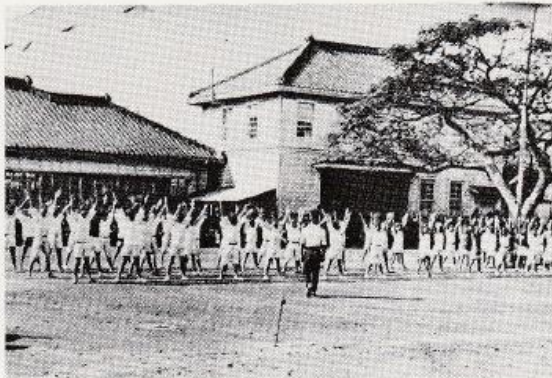
上町に建築された新校舎

— 小学校令の公布により、義務教育4年の制度が確立されたころ —

明治19年4月、小学校令公布により、これまでの初等、中等、高等科の課程を改め、尋常科、高等科の二種とし、尋常科4年を義務教育期間とした。同20年、これを受けて、校名は、「茨城県常陸国河内郡龍ヶ崎尋常小学校」と呼ばれる。この時代は、義務教育とはいえ、授業料の負担が大きかったのか、或

は、また、学校の必要性の中たるみか、就学率は、全国的にも低く、本校でも、該当児童のおよそ50%位の入学であったといわれる。校長は、第5代坂本佑一郎氏、第6代浦上知太郎氏と続き、第7代赤松荘作氏である。

明治21年、市町村制が公布され、同22年、校名は、「茨城県常陸国河内郡龍ヶ崎町立尋常小学校」と呼ばれる。同年23年、教育勅語が渙発され、教育は、すべて、これに帰すべく、全体主義的国民教育がスタートする。このころの児童数、およそ500名。



上町新校舎での体育授業風景

— 根町に龍ヶ崎町外4ヶ村組合高等小学校が設立されたころ —

明治25年9月、龍ヶ崎町外4ヶ村（馴柴、八原、大宮、長戸）組合立の高等小学校が、現在地の県道沿いに設立された。「茨城県常陸国河内郡龍ヶ崎町外4ヶ村組合高等小学校」同29年、府県制、郡制公布により、「茨城県稲敷郡龍ヶ崎町外4ヶ村組合高等小学校」と呼ばれ、初代校長は、大塚茂氏、2代松浦守誠氏、3代は、寺田百次郎氏であり、同45年3月31日の解散まで、龍ヶ崎町外4村の高等科の教育は、すべてここで行なわれた。教育の方法は、女子、男子組を編成、今でいう教科担任制をとっていた。設立当時の生徒数は、137名、多かった年は、明治40年で526名、解散時は、137名と記録にみられる。

この高等小学校の設立によって、本校は、尋常科のみの学校となり、規模は、若干縮小される。26年365名、27年357名、28年351名、29年372名とある。明治29年、「茨城県稲敷郡町立龍ヶ崎尋常小学校」となる。同33年、小学校令の改正により、義務教育の年限

は、4年と統一されるとともに、義務教育無償の制度が確立する。児童数401人。校長は、第10代浦上知太郎氏で、2度目の校長である。

— 小学校令の改正で、義務教育6年の制度が確立されたころ —

明治40年、小学校令が改正され、尋常小学校の修業年限は、2年延長されて6年、高等科は2年と定められて、翌年より実施される。校長は、第11代渡辺金作氏に続いて、第12代伊藤平助氏である。

明治44年度をもって、組合立の高等小学校は解散され、各町村の尋常小学校に併置されるようになる。町は、この校舎を払い下げ、この地に、「茨城県稲敷郡龍ヶ崎男子尋常高等小学校」を設置したので、本校は、「茨城県稲敷郡龍ヶ崎女子尋常高等小学校」となり、2校に分離される。男子校校長は、高等小学校3代校長の寺田百次郎氏第13代であり、女子校校長は、第14代伊藤平助氏である。児童数、両校あわせて682名、教員数18名ずつの36名。

大正時代

— 児童数が急増し、創立当時のおよそ8倍になったころ —

大正3年4月、男子校は、女子校に統合され、「茨城県稲敷郡龍ヶ崎尋常高等小学校」と校名が改められる。統合時の校長は、第15代高橋敬三郎氏である。児童数は大正2年703名、同3年、765名、同4年、817名、同5年、820名。この児童数の増加に対応して、大正3年より5年にかけて、校舎造築が行われる。

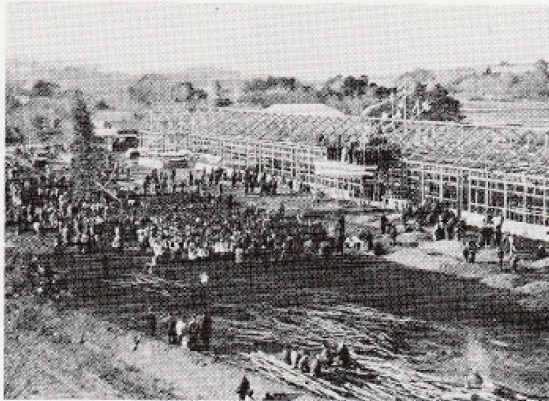
第16代校長柴沼三郎氏の大正11年代は、1160名、第17代校長沢昌哲造氏の大正12年には、1193名、第18代校長杉田祐四郎氏の大正14年には、1149名である。このころの児童数は、創立時のおよそ8倍にも当たる。当然ながら、教室不足をきたし、大正13年4月より、根町の高等小学校の校舎を使って、一部分、ここで授業がおこなわれる。このころより、小学校移転の動きが町内に出てくる。大正14年、小学校新築積立金規約を制定、

全町民、これに協力をする。

昭和時代

— 総工費150000円で、現在地に校舎が建設されたころ —

昭和5年12月、県に校地の指定方を申請、翌6年9月、現在地に指定され、同月12日より、直に校地の作成を実施、昭和7年度より、第3期にわたって校舎建築をなし、昭和10年11月3日、第5館までを完成、この年



現在地に建築された新校舎

より、新校舎で授業完全実施される。児童数1346名。なお、昭和7年度より8年度にかけては、新校舎の建設に伴い、根町の仮校舎が取りこわされたので、本校では、午前組、午後組の二部授業が行なわれた。総工費150,000円、校地坪数13400坪、校地委員長諸岡良夫氏、第1期建設委員長田中秀太郎氏、第2期3期建設委員長岡田宇三郎氏と記録にみられる。新校舎建設期の校長は、第19代菅原栄吉氏で、大正15年7月より、昭和18



現在地にできた龍小新校舎の竣工式

年3月の勇退まで、17年間の長きにわたり、本校発展のため尽された。校舎移転の運びとなった事情及び関係功労者名については、現校門前の記念碑に詳しくみることができる。このころ校訓「感謝・勤労・協和」が制定される。

昭和16年、国民学校令が公布され、校名は「茨城県稲敷郡龍ヶ崎国民学校」となり、教育内容、方法等すべて「皇国の道」に則って実施される。尋常科は初等科と改められ、初等科6か年、高等科2か年の8か年を義務教育期間とした。しかし、高等科の2か年については、国民学校戦時特例により、義務制は解かれた。このころの児童数は、およそ1620名

— 第2次大戦中、羽田精機へ学徒動員のころ —

昭和19年、児童数1600名、この年、高等科の生徒全員が、羽田精機（今の東運の前身）へ兵器づくりに学徒動員される。同20年6月、野戦重砲隊の軍人のため、1、2館の校舎全部が使用されるが、同8月15日、終戦とともに解散させられる。校長は、20代小川荘氏である。

— 終戦後、町立から市立へ —

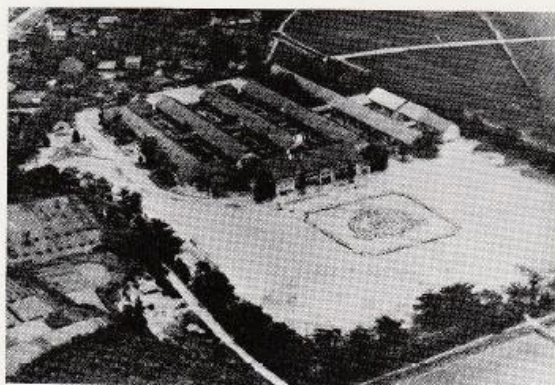
昭和21年5月、文部省は、「新教育指針」を決定。この年より、新制度への移行の準備が行なわれる。同じ5月、軍国主義的思想をもつ教職員一掃を目的に、教職員適格審査委員会が発足、本県では同年8月より、23年3月まで、審査が続く。校長は池田静喜氏第21代であり、審査委員の一人でもあった。

国民学校も本年限り、教育方針も明確なるものもなく、施設設備も不備のまま、教科書も不足し、毎日が、校舎、校庭の戦時中の後しまつに追われるという状況で、教員も児童も学習に身が入らず、いわば教育の混乱期であった。児童数1669名。

それにしても、22年3月、教育基本法及び学校教育法が公布され、本校は、5月1日新しい小学校と新制中学校に分かれ、「茨城県稲敷郡龍ヶ崎町立龍ヶ崎小学校」となる。児童数は、1586名。新制中学校は、5館の教室があてられ、教員は、小学校職員が並任する。23年2学期より、中学校は奈戸岡の羽田

精機寮に移転する。この当時の小学校長は、第22代広田利三郎氏であり、初代新制中学校長は、坂本三郎氏である。

26年5月、校舎増築、第6館5教室が完成する。児童数2251人。29年市制施行、「龍ヶ崎市立龍ヶ崎小学校」と現在の校名になる。数えて、12回校名が変わり現在に至る。児童数2286名、この年最高の児童数に達する。校長は、第23代渡辺達夫氏。



市制施行祝賀の人文字と校舎

— 昭和40年以降、協力教授組織の研究が学研賞に輝くころ —

昭和41年3月、「岩石園」が、同8月には「仲良し山」が、PTAの奉仕により完成する。41年度より、9年間在職された第24代石井理平治氏に代わって、25代増尾武氏が継ぐ。

42年4月、教科担任制の研究に着手、同年9月1日、龍ヶ崎小学校校歌（作詞）ができる。同月30日、学校沿革誌再製成る。43年3月10日、校歌作曲ができ、4月20日、校歌制定記念発表会が開催される。

45年2月、県教育論文に応募、「教師の特性を生かした協力指導の運営と実際」が優秀賞に輝く。3月、2か年の教科担任制の研究に対し、県より感謝状を受ける。46年11月12日、協力教授組織の研究が認められ、学研賞を受ける。同月26日、増尾校長、永年の教育功勞により、文部大臣賞を受賞する。児童数1365年。

昭和47年度より、学校長は、第26代鈴木竹次郎氏に代わる。鈴木氏の時代、49年12月3日には、東京第一法規出版社から、著書「能力を育てる授業と学校経営」を出版、協力教授組織の研究について、全国に公開する。

児童数1524名。

— 昭和50年以降、新校舎の建設がすすむころ —

昭和50年度より、53年度まで、第27代校長坂本正明氏がつづく。52年2月、新校舎建設のための地質調査を行う。3月、学級増のため、プレハブ校舎を建設、52年7月、プレハブ校舎第2期工事が完成、6館を解体、新校舎の建設がはじまる。同7月、小平記念会から、小平賞（50万円）を受賞する。53年3月10日、新校舎竣工式、第1期、鉄筋3階建23教室が完成する。

53年11月7日、第2回めの著書、「子どもの発想を生かす授業と経営」を出版、PTA母親文庫が県知事賞に輝く。10月17日、茨城県PTA連絡協議会長賞を受賞する。

昭和54年度、28代校長武田武夫氏の時代、5月、第4館を解体、第二期工進がはじまる。9月18日より19日にかけて、6年生による第1回共同宿泊学習が実施される。55年2月、創立105周年記念事業第1回運営委員会が開催される。3月21日、第2期工事竣工式を挙行する。児童数1908名。

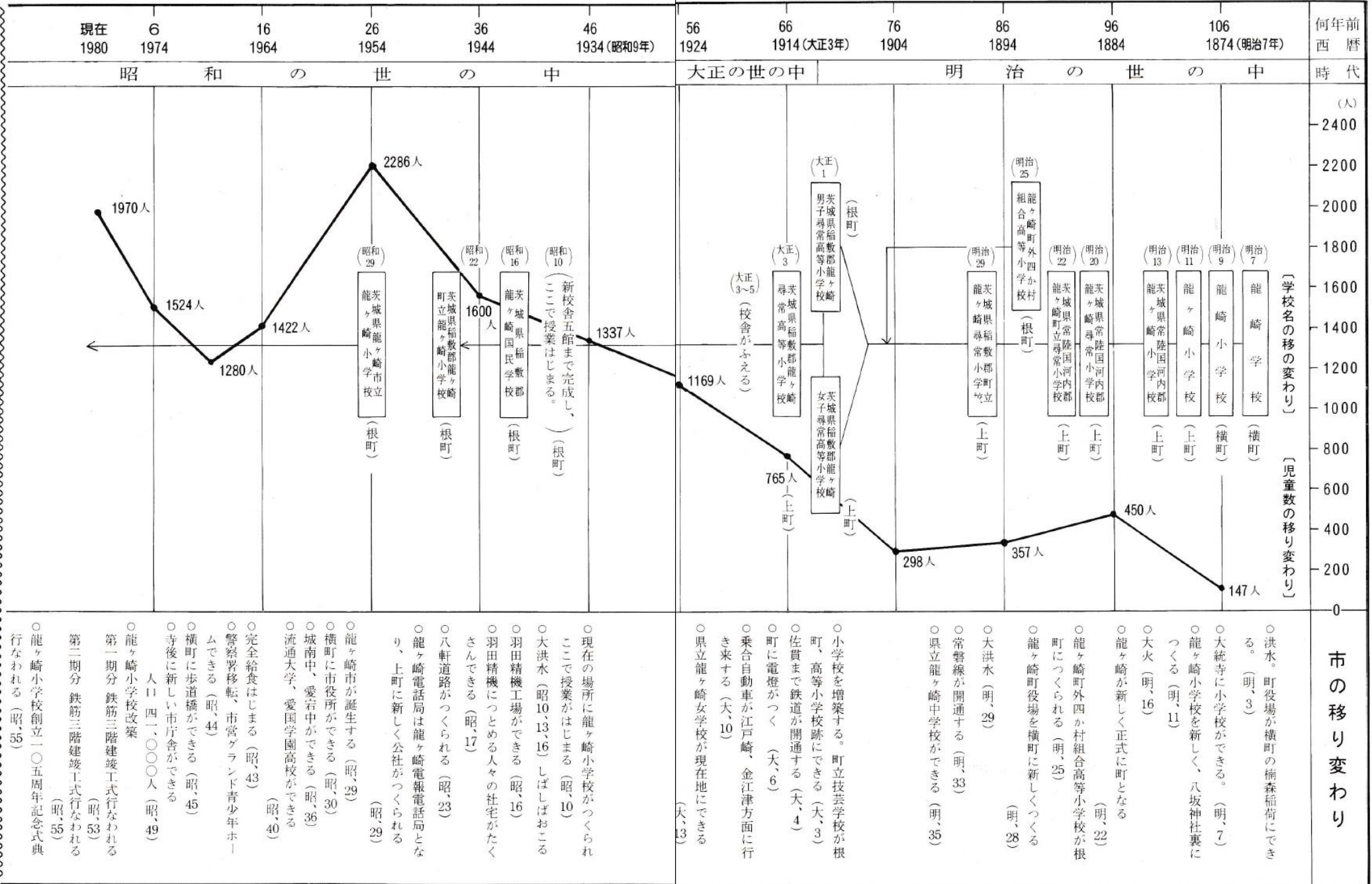
— 木造校舎よ、さようなら —

現在、第3期工事として、体育館の建設が進行しようとしている。来年度5月頃には完成予定とか。それに伴い、幾多の英才を世に送り出してきた木造校舎も、近々、その姿を全く消すことになるであろう。惜別の情、尽きぬものがある。こういう時、町民各位が心を一つにされ、創立105周年の記念式典を挙行されたことは、誠に意義深いことである。

創立以来年々増え続けた児童数は、昭和29年には、2286名と、これまでにはみられない程の人数に達した。その後は、年々減少していくが、44年度の1280名を境に、再び増加をたどり、現在1970名の児童数をかかえている。今後とも年々増加するであろう児童数に対応して、市当局では、分離校建設の準備をすすめているとも聞く。益々の龍ヶ崎小の発展を心から祈念するものである。木造校舎さようなら。龍ヶ崎小学校万才。

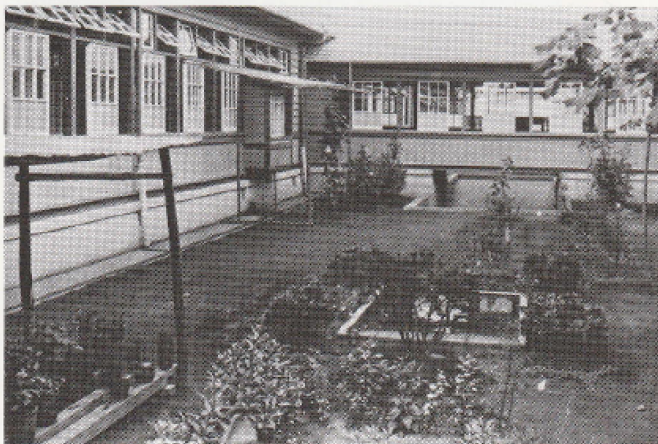
龍ヶ崎小学校の移り変わり

(校名・児童数・場所・校舎)



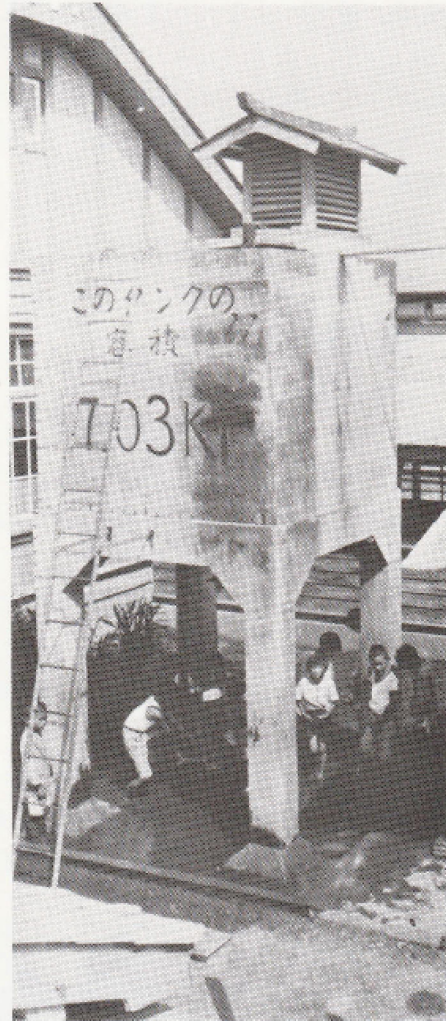
歴代学校長

明治 7 年	教授主任	杉 浦 久 彦
" 8 年	校 長	山 田 惟 一
" 11 年	教授主任	上 島 齊
" 13 年	校 長	椎 名 健
" 14 年	"	坂 本 佑一郎
" 14 年	"	浦 上 知太郎
" 20 年	"	赤 松 莊 作
" 25 年	"	大 塚 茂
" 25 年	"	松 浦 守 誠
" 33 年	"	浦 上 知太郎
" 34 年	"	渡 辺 金 作
" 35 年	"	伊 藤 平 助
" 45 年	"	寺 田 百次郎
" 45 年	"	伊 藤 平 助
大正 3 年	"	高 橋 敬三郎
" 11 年	"	柴 沼 三 郎
" 12 年	"	沢 畠 哲 造
" 13 年	"	杉 田 祐四郎
" 15 年	"	菅 原 栄 吉
昭和 18 年	"	小 川 莊 喜
" 21 年	"	池 田 静 喜
" 22 年	"	広 田 利三郎
" 25 年	"	渡 辺 達 夫
" 32 年	"	石 井 理平治
" 41 年	"	増 尾 武
" 47 年	"	鈴 木 竹次郎
" 50 年	"	坂 本 正 明
" 54 年	"	武 田 武 夫
" 55 年	"	中 島 満 夫



歴代PTA会長

昭和 23 年	鈴 木 富 治
" 25 年	佐 藤 清
" 28 年	中 山 秀 男
" 37 年	小 堀 吉 也
" 39 年	秋 元 義 男
" 42 年	四十栄 直 久
" 44 年	後 藤 唯 夫
" 46 年	菅 井 幸 夫
" 47 年	山 田 政 夫
" 51 年	飯 田 顕 一
" 53 年	潮 田 龍 雄



◇昭和56年度以降の沿革

年号	西暦	主な出来事	児童数	校長名		P T A会長名
昭和56年度	1981年	講堂解体 県指定「算数科学習指導法研究委嘱校」	2,041名	第29代	中島 満夫	潮田 龍雄
昭和57年度	1982年	龍ヶ崎西小学校との分離 県指定「算数科学習指導法研究発表会」	1,410名		中島 満夫	潮田 龍雄
昭和58年度	1983年	県指定「教員基礎研修講座会場委嘱校」	1,389名		中島 満夫	信田 東男
昭和59年度	1984年	ソニー理科教育振興財団優良賞 学生顕微鏡観察コンクール文部大臣奨励賞	1,349名		中島 満夫	豊島 忠雄
昭和60年度	1985年	科学万博見学(2～6年生)	1,268名		中島 満夫	豊島 忠雄
昭和61年度	1986年		1,185名	第30代	大澤 昭一	荒井 宏
昭和62年度	1987年		1,111名		大澤 昭一	大竹 雅夫
昭和63年度	1988年		1,024名	第31代	林 克己	大竹 雅夫
平成元年度	1989年	木造管理棟解体 県統計グラフ展優秀校受賞 学生顕微鏡観察コンクール文部大臣奨励賞	992名		林 克己	大竹 雅夫
平成2年度	1990年	新管理棟使用開始	986名	第32代	梶詰 善七郎	小島 孝行
平成3年度	1991年	第一法規研究賞 学校経営部門 優勝賞受賞 全日本P T A会長賞受賞	962名		梶詰 善七郎	小島 孝行
平成4年度	1992年	市教育研究会指定研究発表会 (自己教育力の育成)	909名	第33代 第34代	千代倉 邦彦 齋藤 勉	小島 孝行
平成5年度	1993年	文部省指定「奉仕等体験学習研究推進校」 野外ステージ 管理棟前庭造園竣工	885名		齋藤 勉	川北 嗣夫
平成6年度	1994年	創立120周年記念集会 文部省指定「奉仕等体験学習研究発表会」	816名		齋藤 勉	川北 嗣夫
平成7年度	1995年	文部省指定「指導法の改善に関する教職員配置等の調査協力校」 県指定「多様な指導法研究推進校」	760名	第35代	平野 泰雄	川北 嗣夫
平成8年度	1996年	音楽鑑賞教育振興会主催 論文・作文コンクール学校賞(優秀賞)	727名		平野 泰雄	大久保 裕
平成9年度	1997年	日教弘教育賞受賞	683名		平野 泰雄	寺田 寛男
平成10年度	1998年	P T A文部大臣賞	664名	第36代	海田 征夫	寺田 寿男
平成11年度	1999年	屋外プール新設竣工	635名		海田 征夫	浅野 好紀
平成12年度	2000年	県指定「ふるさと発見事業推進校」 耐震補強工事開始	605名	第37代	小倉 尚	吉田 宣浩
平成13年度	2001年		600名		小倉 尚	宮本 義則
平成14年度	2002年	市教育委員会指定研究発表会(生活科・総合的な学習の時間)	601名		小倉 尚	櫻井 隆
平成15年度	2003年		587名		小倉 尚	塚本 裕

年号	西暦	主な出来事	児童数	校長名	P T A会長名
平成16年度	2004年		573名	小倉 尚	宮川 崇
平成17年度	2005年	県指定「『教員評価』に関する調査研究校」	556名	第38代 斎藤 勝	岩井 努
平成18年度	2006年		550名	斎藤 勝	栗山 松雄
平成19年度	2007年	国立教育政策研究所指定「いじめ・暴力防止に関する指導方法の在り方についての調査研究協力校」	546名	斎藤 勝	平出 充洋
平成20年度	2008年	文部科学省指定「全国学力・学習状況調査等を活用した学校改善の推進に係る協力校」	507名	第39代 菊田 靖久	倉沢 南州
平成21年度	2009年		476名	菊田 靖久	服部 一郎
平成22年度	2010年		442名	菊田 靖久	澤 俊勝
平成23年度	2011年	東日本大震災に係る除染作業	429名	第40代 岡田 良一	小野村 秀道
平成24年度	2012年		404名	岡田 良一	寺崎 真
平成25年度	2013年	県指定「いばらき理科教育推進事業に係る理科ボランティア派遣モデル校」	339名	第41代 平塚 和宏	岡田 晋
平成26年度	2014年	創立140周年記念集会	329名	平塚 和宏	飯島 進
平成27年度	2015年		302名	第42代 富永 保	久松 章紀
平成28年度	2016年		310名	富永 保	圓城寺 和則
平成29年度	2017年	県指定「いばらき理科教育推進事業に係る理科ボランティア派遣モデル校公開授業研究会」	276名	富永 保	磯貝 努
平成30年度	2018年	県指定「小学校英語マネジメント校授業公開」	284名	第43代 海老原 和夫	野島 洋人
令和元年度	2019年	新型コロナウイルス感染拡大による臨時休校	294名	海老原 和夫	須永 高広
令和2年度	2020年	新型コロナウイルス感染拡大による臨時休校	291名	第44代 大古 輝夫	平出 充洋
令和3年度	2021年	市教育委員会指定「小中一貫教育推進事業実践研究発表」	287名	大古 輝夫	信田 和則
令和4年度	2022年		282名	第45代 小倉 聡	和歌森 将城
令和5年度	2023年	県指定「金融教育研究発表会」	292名	小倉 聡	小室 敦
令和6年度	2024年	創立150周年記念集会	289名	第46代 石崎 和雄	小室 敦

